

Haribhaṭṭajātakamālā 第11話『鹿ジャータカ』和訳

岡野 潔

南アジア古典学 第11号 別刷  
South Asian Classical Studies, No. 11, pp. 1-16  
Kyushu University, Fukuoka, JAPAN  
2016年7月 発行

## Haribhaṭṭajātakamālā 第11話『鹿ジャータカ』和訳

九州大学 岡野 潔

『ハリバツタ・ジャータカマーラー』 (Haribhaṭṭajātakamālā) 第11話の『鹿ジャータカ』 (Mṛgajātaka) は、Indica et Tibetica 叢書から1983年に出版された Michael HAHN と Konrad KLAUS 共著の研究書があり<sup>(1)</sup>、そのおかげでこの第11話はハリバツタのテキストの中で最も学びやすい章の一つになっている。私はこのテキストを九大での演習の授業に使うことを考えて、和訳を作成した。授業で使用する際に便利なように、各韻文・散文ごとに HAHN と KLAUS 両博士が校訂した原文に和訳を付けたかたちにし、また平易な Anuṣṭubh (śloka) 以外の韻律には、韻律名を記した。拙い翻訳であるが、亡き HAHN 先生が愛した、このインド仏教文学史上の最高作である美しいテキストが日本で読まれるために役立つことを期待する。

注意： この和訳では、梵文と合わせて読む際の参考になるように原文に出来るだけ近い翻訳を心がけたため、特別に使った記号がある。⇒と●の記号である。これら二つの記号は原文に見られる修飾と被修飾の関係を示すものである。⇒の記号の直前にある修飾表現が、その後方にある、●の記号の直前の語に懸かることを示す。例を示すと、「まるで親友であるその鹿を失ったかのように⇒、風によって打たれて揺れる小枝があり⇒、至るところに拮がったコオロギの音色をもつ⇒その森●は、心配し悲しみ、泣いているかのようなようでした。(11.25)」—この文では、三つの修飾表現 (⇒) が、被修飾語 (●) の「その森」に懸かっている。

### Mṛgajātaka 『鹿ジャータカ』 (11)

tṛṇam iva jīvitam iṣṭam

karuṇānugatāḥ parārtham ujjhantaḥ /

kaṭhinamanasām api mano

nyanti mṛdutām mahātmānaḥ // [11.1] (Āryā)

---

1. Michael HAHN und Konrad KLAUS (1983): *Das Mṛgajātaka (Haribhaṭṭa-jātakamālā XI) Studie, Texte, Glossar*, Indica et Tibetica Verlag, Bonn.

憐れみをそなえた偉大な者たちは、他者のために、草と同じほどに愛しい [としか思わない自分の] 命を捨てることによって、頑な心をもつ人々の心にも、柔らかさを得させる。

tadyathānuśrūyate | svacchasalilatayā candrikayeva dravībhūṭayā mṛdupavanapreritataraṅ-  
gasamghātayā cakravākamithunopaśobhitapulinayā varāṇasayā nimnagayābhyalaṃkṛtācalāntare  
vividhatarucchāyāpihitajalāśayajale sukumārasādvalaharitaḥbhūbhāge kvacid arāṇye bodhisattvo  
mṛgayūthādhipatir babhūva |

次の様に語り伝えられています。とても澄んだ水のせいで、まるで月光が液状化したかのような⇒、また柔らかな風によって動かされる波の群がある⇒、またチャクラヴァーカ鳥の夫婦によって飾られた岸辺をもつ⇒ヴァーナラサー河●によって飾られた山の内奥において、様々な樹々の影が湖の水を覆っている、また柔らかな草やぶによって緑になっている地所のある、或る森において、鹿の群のかしらとして、菩薩がおりました。

kṣīrodaphenadhavalena tanūdareṇa

prṣṭhena ca bhramarasamghatimecakena /

tārāvilāsaśabalasphuritāgrapakṣmā

reje kaṭākṣa iva yo gahanāntabhūmeḥ // [11.2] (Vasantatilaka)

乳海の泡のように白く、すらりとしたお腹により、また蜜蜂の群のように黒色をした背中によって、[その鹿のかしらの姿は] 森の奥の場所で、瞳に [無数の] 燦めきの斑点があり⇒、震えるまつげの先端をもつ⇒、[女の] 流し目●の [眼の] ように見えました。

tasyaivaṃvidhasya bodhisattvasya kiṃcid rūpalāvaṇyapramāṇānukārī devadattas tatsamīpacārī  
nātimahato mṛgayūthasyādhipatyam cakāra ||

そのようなかの菩薩に、姿の美しさのほどでは多少類似しているデーヴァダッタは、その近隣に生きる巨大な数ではない鹿の群を治める [鹿の] 王でした。

tābhyām adhipatibhyām te pālite ṛṇam aśnatī /

śaṅkāviyogaviśrabdham mṛgayūthe viceratuḥ // [11.3]

これら2匹のかしらの統治によって守られた二つの群は、草を食みつつ、恐れなく安心して生活していました。

atha kadācit sātmiḥbhūtamṛgayāvvyasano brahmadatto nāma rājā nirgamyā vārāṇasyās tiryagu-  
 raḥsthalaviniveśitadhanvā vājivarādhirohī sadṛśānuyātras turagakhurasamuddhatapāmsuparidhū-  
 saranayanapakṣmā divasakarasaṃtāpajanitasvedakaṇākrāntalalāṭadeśaḥ sasainyadhvanisamtrā-  
 sotpatitamayūratittiricakoravanakṛkavākūni viṣamonnatāni nimnabhūmibhāgāni kvacitpadā-  
 ticaraṇasaṃtrāsītaḥariṇakhuravinyāsacakitasphuritaśapharīkulavimuktasravantītatasaḥlilāni matta-  
 gajapatikapolanikaṣaṇasaṃkrāntamadādhi vāsītataruskandhasamīpabhrāntamadhukaraṇāni  
 taṭavīṭapīśākhāvalagnaśuṣkakakubhākṣaphalamadgubalākāpicchaparimīśrakāśakuśavaṃṣataru-  
 paṇasaṃcayasuṣyamānacirātīkrāntagirisaritpūrāni palvalapaṅkavinimagnavyāghrapadāni  
 pakvodumbaragandhādhi vāsītāgahvarāni pavanacalitatanupatākākuṭilabhujagasṛtibhir ankitamār-  
 gapāṃsūni vanāntarāni vilokayan kiṃcid atikramya tan mṛgayūthadvayaṃ viśrabdhasthitam  
 sainyena pariveṣṭayām āsa ।

或る時、狩猟という悪徳を習慣にしたブラフマダッタという王が、ベナレスから〔猟  
 に〕出かけました。弓を斜めに胸の上につけて、最高の馬に乗り、似た〔装備の〕お  
 供を引き連れており、目のまっげは馬たちのひずめが巻き起こす埃で汚れ、額のところ  
 は太陽の焦熱から生じた汗のしずくに覆われた〔王は〕、軍の〔立てる〕物音に怖がっ  
 て飛び上がった孔雀・ヤマウズラ・チャコーラ鳥・野生の鶏がいる、平坦ではない高  
 かったり低かったりする土地がある⇒、— あちこちで歩兵の歩みに驚かされた鹿たち  
 の蹄が〔水中に〕踏み下ろされることで慄えわななく小魚たちの群が逃れ去る川の岸  
 辺の水がある⇒、— 発情した象王が額を擦りつけることで染み込んだ発情液の香りが  
 ついた樹の幹の近くを飛び回っている蜜蜂の群がいる⇒、— 岸辺の樹々の枝に〔未  
 だ〕くっついている干涸らびたカクバやアクシャの実や〔更に〕マドグ水鳥や鷺たちの  
 尾羽が混じりあう、カーシャ草やクシャ草や竹の、茎や葉の集積によって、久しい〔前  
 にそこに〕溢れ出た山の河流の洪水が〔有ったことが〕示唆されている⇒、— また沼  
 の泥にはまり込んだ虎の足跡がある⇒、— 熟したウドウンバラの香が染みついた稠林  
 がある⇒、— 風に動かされた細長い旗〔のように〕ぐねぐね曲がった蛇たちの〔這っ  
 た〕跡によって道標が付けられた〔かのような〕道の塵がある⇒〔そのような〕森の内  
 部●を観察しながら、少し奥に進み行き、そして安心した状態にいるその二つの鹿の群  
 を、〔彼の〕軍で包囲させました。

atha vilokya camūṃ dhṛtakārmukām

calakhalīnasamucchritanisvanām /

aśaraṇāḥ paribhinnakadambakā

bhayaśaṇa mṛgāḥ paridudruvuh // [11.4] (Drutavilambita)

揺れるくつわによって騒音を立てる、弓を手にした軍を見て、鹿たちはよりどころな  
 く逃げ回りました、恐怖のあまり群が散り散りになって。

avalokya samantataḥ parītān  
nṛpasainyena mṛgān sa bodhisattvaḥ /  
śaradheḥ śaram uddharantam ārād  
avanīśaṃ samupetya saṃbabbhāṣe // [11.5] (Mālabhāriṇī)

王の軍によって鹿たちが八方を囲まれたのを見て、かの菩薩は、遠くで矢筒から矢を抜き出しつつある王に近づき、語りかけました。

yugapan mṛgasamkṣayāya  
kasmād dhanur etat kriyate tvayā sabāṇam /  
divase divase mahānaṣam te  
mṛgam ekaikam ahaṃ visarjayiṣye // [11.6] (Mālabhāriṇī)

「何故、一斉に鹿たちを滅ぼそうとして、あなたはこの弓に矢をつがえるのですか。毎日、あなたの台所に私は一匹ずつ鹿をゆかせましょう。」

nijagāda mahīpatis tatas taṃ  
yadi satyaṃ mṛga tat tathā kariṣye /  
na kariṣyasi ced imāṃ vyavasthāṃ  
prahariṣyāmi tato mṛgeṣu bhūyaḥ // [11.7] (Mālabhāriṇī)

すると王は彼に答えました。「鹿よ、もしその[言葉]が真実であれば、私はその[提案の]とおりにしよう。この取り決めをもしあなたが実行しない時は、その後、再度また私は鹿たちを攻撃することになろう。」

pratipadya gate 'tha bhūmipāle  
dhalacchattranivāritārkatāpe /  
nijagāda sametya bodhisattvo  
hariṇāṃs tān punar ekatām upetān // [11.8] (Mālabhāriṇī)

白傘蓋をもって太陽からの熱苦を防いでいる王が、約束して立ち去った時、再び一つに集合したその鹿たちに、菩薩は近づいて、言いました。

yugapat samupāgate vināṣe  
yadi labhyeta punaḥ kramaḥ sa sādhuḥ /  
kramam etya cirāya śāntihetuṃ  
bhavitā nāma kadācid anyad eva // [11.9] (Mālabhāriṇī)

「もし、一挙に [われらが] 全滅しそうな状況において、しかし [それを回避する] 正しいやり方が得られるのであれば、平和の原因として [その] やり方を長い間用いることによって、いつか他の [もっとよい状況] が現れるでしょう。

gajakumbhavibhedapaṇḍitānām  
balinām kesariṇām api dviṣantaḥ /  
kṣapayanti śarair asūn narendrāḥ  
kim u darbhāgrabhujām vane mṛgāṇām // [11.10] (Mālabhārīṇī)

象の額の隆起を引き裂くことに長けた、力あるライオンたちの命すら、[彼らを] 敵視する王たちは、矢をもって滅ぼすのです。まして、森で草の葉先を食べている鹿たちは問題になりません。

sitamaṇiśucibhis tamo vibhindañi  
jagad avabhāsya marīcibhiḥ śaśāṅkaḥ /  
patati vigatakāntir astaśailāt  
kṣaṇaviśārāva eva sarvabhāvāḥ // [11.11] (Puṣpitāgrā)

真白な宝玉の [ように] 燦めく光線をもって、黒闇を打ち砕く月は、世界の生き物を照らしてから、日没山から沈んでゆきます、美しさを失って。あらゆる存在は瞬時にもろく滅びるのです。

salilam urutaraṅgaṃ raṃhasā kṣobhayitvā  
harati jaladhimadhyāt pannagaṃ vainateyaḥ /  
atipatati na kaścit karmaṇām kovido 'pi  
prathitagurubalo 'pi prāktanānām vipākam // [11.12] (Mālinī)

素早く、大波の水を乱して、ヴァイタネーヤ（ガルダ鳥）は海中からナーガを奪い取ります。[そのように] 何者も、前世の業の異熟を免れることはできません、どんな達人であっても、偉大な力で有名なる者も。

iti karmagatiṃ jñātvā vijñānapaṭavo budhāḥ /  
prāṇātyaye 'pi nāyānti viśādaṃ dhīracetaṣaḥ // [11.13]

このように業の働きを知って、知性の鋭い、堅固な心をもつ賢者たちは、命が失われる時にも、絶望に至ることはありません。」

atha yūthapatidvayasamādeśāt tābhyāṃ yūthābhyām ahany ahany ekaiko mṛgas tasya rājño bho-  
janapaktikāle mahānasam agāt | evaṃ ca katipayeṣv ahaḥsv atikrānteṣu devadattayūthavartinyāḥ

samāpannasattvāyā hariṇyāḥ prāpto gamanavārah | tataḥ sā svayūthapatim āgamyovāca | svāmin  
niyatam śvaḥ prasavitṛi bhavitāsmi | tataḥ prasūya vane mṛgaśāvaṃ vinikṣipyā gantāsmi | mayā  
khalu tatra yuktam martum | naitena garbhasthena śāvakeneti | devadatto yūthapatir uvāca | tat  
katamo 'nyo mṛgas tava vāre prāpte gamiṣyati | sarvathā tvayaiva gantavyam anātmajñā bhavati  
yā mamājñāṃ laṅghayati | tena yūthapatinā nirbhartsitā sāpasṛtya mṛgī cintayām āsa | yo 'yaṃ  
dviṭīyo yūthapatir ayam atikāruṇikas tasmād enam api tāvad abhyarthayiṣye | gatvā ca bo-  
dhisattvam uvāca |

二匹の群のかしらの指示により、彼らの〔二つの〕群から鹿が毎日一匹ずつ、かの  
王の食事を料理する時間になると、台所に行きました。このようにして幾日が過ぎた  
時、デーヴァダッタの群にいる妊娠した雌鹿が行く番になりました。すると彼女は自分  
の群のかしらのところに行って、言いました。「わが主よ、間違いなく明日、私は出産  
しそうです。そこで、産んでから、森に鹿の仔を置いて、私は〔王の台所に〕行くこと  
にします。私が其処で死ぬのはよいのです、しかしお腹にいるこの子と一緒にには行けま  
せん。」群のかしらであるデーヴァダッタは答えました。「それでは他のどの鹿が行く  
のか、お前の番が来ているのに。どうしても、お前自身が行かなければならない。私  
の命令に背こうなんて、お前は身の程をわきまえない奴だ。」その鹿のかしらから罵倒  
されたその雌鹿は、引き下がりながら、考えました。「第二の鹿の群のかしらである  
方は、とても憐れみ深いお方だ。それ故、今はあの方にお願ひしましょう。」

〔彼女は〕行き、菩薩に言いました。

mama yūthapate vārah prāpto gantum nṛpālayam /

āsannaprasavā cāsmi tad enam rakṣa śāvakam // [11.14]

「群のかしらよ、王の宮殿にゆく私の順番が来たのですが、私は出産間近です。それ  
故、この子をお護りください。

prasūtamātram ālinam avalihya ca jihvayā /

stanaṃ ca pāyayitvāhaṃ śāvaṃ cañcalanetrakam // [11.15]

生まれたばかりの、眼をきよろきよろさせて踞っている子を私は舌で舐め、乳房  
で〔お乳を〕飲ませてやり、

vanānte śaṅkhaśakalacchāyair daśanakudmalaiḥ /

sprśantaṃ śādvalaśikhāṃ vilokya ca puraḥsthitam // [11.16]

森の奥で、貝殻のかけらのような色をした、芽のような〔小さな〕歯で、若草の先端  
に触っている、目の前にいる〔わが子〕を見てから、

mama yūthapate yūthe bhaginy asti kanīyasī /

gamiṣyāmi kṛtārthāhaṃ tasyāṃ nikṣipyā putrakam // [11.17]

群のかしらよ、私の群には妹がいますので、彼女に子供を預けて、目的を遂げた私は〔王宮へ〕行きます。」

iti putralālasām tām

hariṇīm abhidhāyinīm samālokyā /

yūthapater ārūḍhaṃ

sutarām anukampayā hṛdayam // [11.18] (Āryā)

このように語る、子を希求するその雌鹿を見て、群のかしらの心は憐れみによってたいそう一杯になりました。

aparicite 'py anukampā

duḥkhini sutarām vivardhate sādhoḥ /

jalasiktamūlajālā

lateva vṛkṣaṃ samālambyā // [11.19] (Āryā)

見知らぬ者であっても、苦しむ者に対しては、気高い者の憐れみは激しく増大する。あたかも樹に抱きつき、水に濡れた根をもつ蔓草のように。

yasyaivāsty anukampā

dīnaṃ śaraṇāgataṃ samālokyā /

tadvyasanabhaṅgahetum

sa eva kurute paraṃ yatnam // [11.20] (Āryā)

庇護に求めて頼ってきた、困苦する者を見て、憐れみをいただいたその者こそが、その不幸を滅ぼすために、最大の努力をする。

tām ūcivān atha mṛgīm mṛgayūthanātho

bhadre parityaja śucaṃ manasi sphurantīm /

tvam tiṣṭha nirvṛtim upetya vane carantī

yāsyāmy ahaṃ narapateḥ svayam eva veśma // [11.21] (Vasantatilaka)

さて鹿の群のかしらは、その雌鹿に言いました。「よきご婦人よ、[あなたの]心に満ちている悲しみを捨てなさい。あなたは[ここに]留まっていなさい、完全な幸福に至り、森の中を歩きながら。私が自ら、王の宮殿に行きます。

bālaṃ śirīṣaharitaṃ tṛṇam ādaśantaṃ

candrāṁśujālavimalaṁ salilaṁ pibantam /  
saṁkrīḍamānam iha putrakam eṣāśvaiḥ  
sārdhaṁ ciraṁ samavalokaya cañcalākṣam // [11.22] (Vasantatilaka)

シリーシャ樹の〔花のように〕緑いろの、新鮮な葉っぱを噛んだり、まるで月光の集積のように浄らかな水を飲んだり、ここで〔他の〕鹿の子たちと一緒に遊んだりしている、きよろきよろした目の〔あなたの〕幼子を、〔あなたは〕いつまでも観ていなさい。」

āsvāsyā tām iti mṛgīm sa jagāda dhīras  
trātā yathādyā hariṇī maraṇān mayeyam /  
duḥkhāt punarbhavakṛtāj janatām tathaiva  
trāyeya mārajayinīm samavāpya bodhim // [11.23] (Vasantatilaka)

そのように、かの心堅固な者（群のかしら）は雌鹿を安心させてから、〔誓願を〕述べました。「今日私がこの雌鹿を死から救ったように、それと同じ様に、私は〔いつか〕マーラ（魔）に勝てる悟り（菩提）を得てから、輪廻によって作られる苦しみから生類を護ることができますように。」

ity uktvā sa yūthapatir udarākṛāntibaddhoṣmaṇaḥ khuraputoṭkhātarajaskān mṛgaromanthano-  
jjhitabadarāsthinicitaparyantād vasatisthānāt prāg eva samutthāya vimanasā  
yūthenānugamyamāno vārāṇasīm abhitaḥ pratasthe |

このように言うてから、〔鹿たちの〕腹部が置かれたことで熱がこもった⇒、〔沢山の〕蹄が〔踏んで〕掘り起こした塵埃がある⇒、鹿たちが反芻して吐き出したナツメの実の種が周辺に積み重なっている⇒、〔彼らが〕棲む地所<sup>●</sup>の前方で、かの群のかしらは立ち上がって、バナレスに向かって出発しました、憂い悲しむ〔鹿の〕群に後続されながら。

vikośapuspās tam athākulākulāḥ  
kalair alīnāṁ virutair visāribhiḥ /  
vidhūtaśākhāgrakarā nabhasvatā  
nivartayām āsur ivācaladrumāḥ // [11.24] (Varṇasastha)

開いた花々をもち⇒、蜜蜂たちの拡がる甘い羽音によって充ち満ちた⇒、風によって枝の先という手を震わせる⇒、山の樹々<sup>●</sup>が、彼を引き留めようとするかのようでした。

vimucyamānaṁ suhr̥deva tena tan

mṛgeṇa vātāhatalolapallavam /

visāricīrvirutam samantato

vanam rurodeva samutsukotsukam // [11.25] (Vamśastha)

まるで親友であるその鹿を失ったかのようにであり⇒、風によって打たれて揺れる小枝があり⇒、至るところに拮がったコオロギの音色をもつ⇒その森●は、心配し悲しみ、泣いているかのようなようでした。

atha bodhisattvo vārāṇasīsamīpam āgamy kiṃcid vilambya tan mṛgayūtham ity uvāca | nivar-  
tyatām idānīm | sulabhaviyogāni hi lokasaṃgatāni | suciram api vasantakālaramaṇīyam aravinda-  
vanam upāsya himasamayaparimlānapalāsakesarakarṇikam apagatagandham apahāya gacchaty  
eva prakṛticañcalā śrīḥ | avabhāsyā ca prāvṛṭkālajaladapaṭāvaguṇṭhitāni digvadhūmukhāni  
lāsyam iva ca darśayitvā viraktā iva veśyāṅganāḥ śaratkālavigalitasalilalaghūn apagatavibhāvān  
kārukān iva parityajanti jaladharān aciraprabhāḥ | kṣaṇādāmukhaviśeṣakaḥ śīśīrāṃśur api  
prabhātasamaye parityajyate sahayā kāntīyā | sarvathā na tat kiṃcij jagati vidyate yan nānyo-  
nyaviyogi syād iti vicintya dharmaparāyaṇair yuṣmābhir bhūtvā samyag ātmā paripālānīya iti |  
tac ca mṛgayūtham sthitvā bodhisattvam ā cakṣurviśayād gacchantam avalokya piṭṛviyogād iva  
śokaśalyakṣatahrdayam sūnyam iva tad vanam pratyājagāma | bodhisattvo 'pi ca harīṇa-  
varāhamahiṣājāsthinīcaye lagnaśvagaṇakalahabhīṣaṇam utpatitāvalīnasaraghākulamāṃsape-  
śīkam upanihitāniśātakartanīkam mṛgāgamanapratīkṣibhir aurabhrikair ākīrṇasūnāsthānam  
āgamyāvatasthe | te ca tadvadhadhikṛtāḥ puruṣā yūthapatim ādāya rājñe darśayām āsuḥ |

さて菩薩がベナレスの近くに來た時、少し歩みを止めて、その鹿の群にむかって語り  
ました。「今ここで、引き返しなさい。世界において、結合したものは容易く分離する  
ものです。本性上移り気な「美」たちは、春の季節には美しい蓮の群に久しく留まって  
いますが、冬の季節には花卉・花糸・花托が萎れて香りを失った [蓮の群] を捨てて、  
立ち去ってしまいます。 [夏になると] 光輝いて現れ、雨期の間は雲という衣に包まれ  
ていて [見えなかった] 天女の顔を示し、踊りも見せてくれたのに、つかのまの [彼女  
たち「美」は]、まるで情を失った娼婦たちが財産を蕩尽した愛人たちを捨て去るよ  
うに、秋の季節には雨水を流して軽くなった雨雲たちを捨て去ります。夜 [の女神] の  
顔にある [赤い] 額の印である月ですら、夜明けになると、生来の「美」から見捨て  
られます。世界には互いに別離することがないところのものなど、全く何一つ存在しま  
せん。このように熟慮して、あなた方は法に専念しながら、正しく自己を護るべきで  
す。」

その鹿の群は [そこに] 立ったまま、菩薩が視界から消え去るまで見つめてから、  
まるで父親と別れたかのように、悲しみの矢に傷ついた心をいだいて、空虚に見える森  
に戻りました。

さて菩薩は、鹿・猪・水牛・山羊の骨が山と積まれている場所にたむろする犬の群の喧騒が恐ろしい⇒、飛び立ったり降りたりしている蠅に充ちた肉の塊がある⇒、鋭い包丁が置かれている⇒、鹿がやって来るのを待ち受けている屠殺人たちによって一杯である⇒屠殺場●にやって来ると、[そこに] 立ち止まりました。彼の屠殺をとりしきるその男たちは、[鹿の] 群のかしらをとらえて、王に見せました。

athābhāṣata taṃ rājā hariṇaṃ hariṇekṣaṇaḥ /<sup>(2)</sup>

aparikṣīṇayūthas tvam vada kiṃ svayam āgataḥ // [11.26]

鹿を見た王は、かの鹿に言いました。「群が全滅していないのに、あなたはなぜ自ら来られたのか、語ってください。」

bodhisattva uvāca |

garbhiṇī hariṇī deva śaraṇaṃ mām upāgatā /

putradarśanakāṅkṣiṇyās tasyā vāre 'ham āgataḥ // [11.27]

菩薩はいいました。—

「王よ、妊娠した雌鹿が私に救いを求めて来ました。子を見たいと願う彼女の[殺される] 番に、私が来たのです。」

putrakaṃ draṣṭum icchantyāḥ pūrayitvā manoratham /

eṇyās tasyāḥ paraṃ prīto manye 'haṃ mṛtyum utsavam // [11.28]

子を見たいと望んでいる、その雌鹿の希望を満たすことができ、私はこの上なく嬉しい。私は死を祝祭と見なします。

hariṇīm hariṇaṃ cātra yātum ālokya mṛtyave /

yan me samabhadra duḥkhaṃ tad adya na bhaviṣyati // [11.29]

[これまで] 雌鹿や雄鹿が死ぬために此処へゆくのを、私には苦しみがありました。その[苦しみが] 今やもうありません。

tasmāt pramāpaya nareśvara mām idānīm

---

2. 第26詩節 pāda a は次の HAHN (2007) Editio Minor 版により、IeT版 (1983) を修正した。Michael HAHN (2007): *Haribhaṭṭa in Nepal. Ten Legends from His Jātakamālā and the Anonymous Śākyaśiṃhajātaka. Editio Minor*. Studia Philologica Buddhica Monograph Series XXII, The International Institute for Buddhist Studies, Tokyo.

aurabhrikaiḥ kathaya deva vilambase kim /

atyāyatena karuṇākavacena baddhaṃ

ceto bhinatti na viśādaśaro mamedam // [11.30] (Vasantatilaka)

それ故、王よ、今や私を屠殺人たちによって殺させてください。お命じください。王よ、何を躊躇っておられるのですか。とても大きな『憐れみ』という鎧をつけた私の心を、『意気消沈』（気後れ）という矢が突き通すことはありません。」

atha sa rājā tasya tām parārthapratipattiṣṭīyasīm anukampām vicintya vismitamatir upālabdha  
iva lajjayā bodhisattvam uvāca | sādhu sādhu yūthapate |

かの王は、驚愕した心で、その〔鹿〕がもつ、他者に利益を得させることに敏感な同情心を洞察すると、羞恥心に捉われたかのように、菩薩に語った。「何とすばらしいことでしょう、群のかしらよ。

parārthaniṣpattinibaddhacetā

mṛgākṛtis tvam puruṣapradhānaḥ /

paropaghātāya nibaddhayatnā

vayaṃ khalu vyālamṛgaiḥ samānāḥ // [11.31] (Upendravajrā)

他者の利を成就させることに懸命な心をもつあなたは鹿の姿をしていますが、人間の最高者です。〔逆に〕他者を害するために、懸命に努力する私たちはまったく野獣と同じです。」

atha bodhisattvo vipratīśāravantaṃ rājānam avetya jātaviśrambhamukham ity uvāca |

さて菩薩は王が後悔を抱いているのを理解し、信頼の念を起こした顔をした〔彼に〕、次の様に言いました。

śaraṇam upagataṃ kṛtāparādham

ripum api pāsi kila vyudasya kopam /

kathaya katham anāgasāṃ mṛgāṇām

upari patanti taveṣavo niśātāḥ // [11.32] (Puṣpitāgrā)

「〔自分に〕保護を求めに来た者には、罪を犯した敵であっても、怒りを捨てて、あなたは保護すると聞きました。おっしゃってください。どうして罪のない鹿たちの上に、あなたの鋭い矢が射かけられるのですか。

prahṛtaṃ na tvayā yuddhe dviṣaty api parānmukhe /

nihaṃsi bhayavitrastān hariṇān naśyataḥ katham // [11.33]

戦場においてあなたは、背中を向けて逃げる者には、仇敵であっても攻撃しません。どうしてあなたは恐怖におびえて逃げ去る鹿たちを攻撃するのですか。

jahihi mṛgayākṛīḍām asatsaṃkalpavardhitām /

narakāgneḥ sphuraddīpter bhavitrī yeyam āhutiḥ // [11.34]

妄分別によって育まれている、狩猟という娯楽をやめなさい。それは〔来世で〕燃えあがる焔をもつ地獄の火のために捧げられる供物になります。」

atha sa rājā pramuditamanās taṃ yūthapatiṃ mahati siṃhāsana āropya savinayaṃ nīcairāsanam adhiṣṭhāya proktavān | aho subhāṣitaṃ kriyatām me mohatimirāpanodini dharmadeśaneti | tato bodhisattvaḥ sakalayā rājapaṣadāvalokyamānas taṃ rājānaṃ samrādhayann ity uvāca |

王は悦んだ心で、かの群のかしらを大きな王座に昇らせてから、恭しく下の座に坐り、言いました。「ああどうか、暗愚の闇を追い払う、法の教示たる『善説』（すぐれた講説）を私にお示し下さい。」

すると菩薩は、すべての王の徒衆に見つめられながら、そして王の願いを聞き入れながら、次の様に語りました。

subhāṣitaprītir anunnaṭiḥ śriyā

parārthanīṣattipaṭīyasī kriyā /

guṇeṣv atrptir guṇavatsu cādarō

virūḍham etac caritaṃ mahātmanām // [11.35] (Vamśastha)

『善説』を好み、栄光によって高慢にならず、他者に利を得させることに最も適した行動をして、もろもろの徳性〔を集めること〕に飽きることなく、徳性をもつ者たちに敬意を示す — これが、偉大な者たちがもつ、大人の振舞です。

nitāntam āviṣkṛtatuṅgatejasī

ubhe manuṣyasya manuṣyalakṣmaṇī /

adainyam āpatsv api cittagauravād

apatrapā cāryapathaprakāśinī // [11.36] (Vamśastha)

はなはだ明瞭で気高い光輝がある➡、人間にとって人間たるしるし（標識）であるところの➡、二つのもの●があります。— (1) 不幸の中でも、心〔の偉大さ〕を重んじる故に、みじめな気持ちにならないこと、(2) そして聖者たちの道を指し示す、「愧じる心」です。

khalāḥ prakṛtyaiva malīmasāsāyā

vṛthā pareṣām ayaśaḥsu jāgrati /  
svacittaśuddhau viniṣṭabuddhayo

budhāḥ punas teṣu bhṛṣaṃ dayālavaḥ // [11.37] (Vamśastha)

俗悪な人々は本性上穢れた心を持ち、無用に、他の者たちの〔犯す〕不名誉を監視しています。しかし賢者たちは、知性〔の方向性〕を自分の心の清浄さの上に置いており、彼ら（凡俗の人々）に対しても、つよく同情をもちます。

nareṣu tulyodayapauruṣeṣv api  
kriyā na sarvasya paropakāriṇī /  
parisphurajjyotiṣi nirghane nabhasy

agastyā evāmbu karoti nirviṣaṃ // [11.38] (Vamśastha)

社会的成功と男らしい偉業とが等しい、〔立派な〕人々においてすら、なす行為はすべての他者を益するものではありません。雲なく、燦めく星々を有する天空において、アガステイヤ星（カノープス星）のみが水から毒を消します（地上のあらゆる水を浄めます）。

vicintyamāno 'pi karoti vismayam  
visāriṇā saccaritena sajjanaḥ /  
yadā tu cakṣuḥpatham eti dehinām

tadāmṛteneva manāṃsi siñcati // [11.39] (Vamśastha)

高貴なる人々は、〔周囲に〕ふりまく善行によって、考慮（予想）されつつも、驚嘆の念を引き起こします。彼らが人々の視界に入るとき、あたかも不死の甘露によるかのように、〔人々の〕心を〔浄め〕濡らすのです。

yasyāyāmi paropakārasalilasroto na vicchidyate  
dhīcakṣuṣ ca viyogi yasya tamasā dvāv eva tau jāgrataḥ /  
anyeṣāṃ paśudharmaṇām parahitavyāpāradurmedhasām

tulye rātryahanī pramattamanasām ajñānanidrāvātām // [11.40] (Śārdūlavikrīḍita)

或る者がもつ『他者への助け』という長い〔善行の〕水流が途切れることがなければ、また或る者の『智慧』という眼が〔暗愚の〕闇から離れていれば、——彼ら二者だけは、〔輪廻の長夜において〕目覚めています。しかし他の者たち——家畜のような生き方を持ち、利他の活動に関して暗愚な者たち、怠惰な心を持ち、無知という眠りにいる（智慧の眼をもたない）者たちにとって、昼も夜も同じです（昼も夜も同じ不覚醒の中にいます）。

samsāre bhramato mahāndhatamase samṛtiṣṭhamānasya vā  
sādhoh sādhuphale nitāntamahatī dve eva te mām prati /  
yatra projjhya gr̥haṃ tapovanam abhiprasthīyate śreyase

yasmin vā kriyate vivekapaṭubhiḥ sākam kathā sūribhiḥ // [11.41] (Śārdūlavikrīḍita)

私が思いますに、大暗黒の闇である輪廻の中を迷いつつある者（凡俗の人）、または〔そこに〕留まっている善人にとって、〔次の〕二つのことだけが、とても大きな善果をもたらす。一は、〔彼が〕家を捨てて、至福のために苦行林に出発することです。また二は、〔彼が〕判別の学に明るい賢者たちと共に会話することです。

bhujyante svagr̥hasthitā iva sukhaṃ yasyārthibhiḥ sampadaḥ  
paṭvī yasya ca dhīs tamaḥprahataye dvāv eva tau prāṇitaḥ /  
yas tv ātmaṃbharir unnate 'pi vibhave hīnaś ca vidvattayā

tasyālekhyamaṇer ivākṛtibhṛtaḥ sattāpy asattā nanu // [11.42] (Śārdūlavikrīḍita)

或る者がいて、もしその者が自分の家にある財を、乞い求める〔貧しい〕者たちに快く享受させるならば、また、或る者がいて、もしその者の明晰な知性が〔暗愚の〕闇を打ち破るために向いているならば、その両者のみは、〔本当に〕生きているのです。しかしもし或る者がいて、その者が莫大な財の中においても利己的であり、また学識を欠いているなら、彼は存在するといっても、実は非存在をもっているのではありませんか。あたかも、形姿だけをもつ、絵に描かれた〔だけの〕宝玉のように。

kṛcchrāl labdham api krameṇa bhavati prabhraṃśī bhūyaḥ sukhaṃ  
tadbhraṃśe paritāpam eti puruṣaś cittānalaṃ jvālayan /  
duḥkhasyāśya bhavānubandhajanāni hetuḥ śaṭhā jālinī

te 'tyantaṃ sukhino manaḥsu nihitā yaiḥ samyag alpecchatā // [11.43] (Śārdūlavikrīḍita)

苦勞して獲得した幸せがまた再び徐々に崩れ去ってゆく時、その崩壊にあたって、人は心の火を燃え上がらせて、ひどく苦しみます。彼の苦しみの原因は、〔輪廻的〕生存への結合を生じさせる、欺く女である『渴愛』です。もし或る者たちが心において正しく『小欲たること』を確立しているなら、その者たちは非常に幸せです。

mohacchedi subhāṣitaṃ vinayati dravyaṃ vinaiva śramād  
adravye tu bhavanty api sphuṭapadā vyarthopadeśā girah /  
karmāreṇa paṭīyasāpi vighanavyomendranīlacchaviḥ

śrīgarbhaḥ kriyate kalaṅkapaṛuṣād ghaṇṭīkṛtān nāyasaḥ // [11.44] (Śārdūlavikrīḍita)

暗愚の闇を切り裂く『善説』（すぐれた講説）は、苦勞なしに正しい事実に導きます。しかし不実な〔教師〕においては、明解な表現であっても、話す言葉は無益な教え

となります。鍛冶職人は、最も有能であっても、雲一つない天空の [ような] サファイアの光沢をもつ刀剣を、ベルを作る [ための] 錆だらけの粗悪な鉄から製造することはしないのです。」

iti guṇāguṇāntaravidā mahārājena satpathāśrayiṇā bhavitavyam iti | atha sa rājā dhar-makathāmṛtāsvādaprīnitamanā dattamṛgābhayaḥ sabahumānam iti bodhisattvaṃ praśaśamsa |

このように偉大な王は、徳性と不徳性の区別を知り、正しい道に依る者にならねばなりません、——と [鹿のかしらは] 語りました。すると法話がもつ不死の甘露の味に心楽しんだかの王は、鹿たちに安全 [の約束] を与えてから、深い敬意をもって次の様にボサツを称賛しました。

utpāde sati loka eṣa maraṇavyādhiśramair bādhyate  
tṛṣṇāntantunibandhanasya jagato bhūyas ta evādhayaḥ /  
ity acchinnapunarbhavapratibhayaḥ saṃsāra ā nirvṛter  
yuṣmatsaṃgamahetur ity avagato nāyaṃ sadoṣo 'pi naḥ // [11.45] (Śārdūlavikrīḍita)

「 [命の] 発生があれば、この世界 [の生物] は死と病気と疲労によって苦しめられる。渴愛という紐縄に縛られている生類にとって、繰り返しそれら (発生) は苦悩である。輪廻は、涅槃 [が訪れる] まで、途切れのない再生の恐怖をもつものであるが、 [しかし輪廻は] あなたとの出会いの原因であると理解した。 [すると] それ (輪廻) は私たちにとって悪い欠点ではない。」

atha bodhisattvaḥ siṃhāsanaḍ avatīrya rājānam āpapracche |

さて菩薩は王座から降りて、王に別れを告げました。

mayā vinā nṛvara viṣaṇṇamānaṣaṃ  
samākulaṃ hariṇakulaṃ bhaviṣyati /  
akaṇṭhakāṃ ciram anuśādhi medinīm  
vrajāmy ahaṃ tvaritapadaṃ tadantikam // [11.46] (Rucirā)

「王よ、私がいなければ、 [私の] 鹿の群は失意の気持ちをいだし、混乱するでしょう。賊なく、大地を久しくお治めください。私は速い足どりであなたのもとにやってくるでしょう。」

tataḥ sa yūthapatiḥ kṣitipālānumatas tad eva vanam ājagāma |

それから、王から許可を得たその群のかしらは、その森に戻って行きました。

atha yūthapatiṃ vilokya dūrān  
muditam tan mṛgayūtham utsukākṣam /  
daśanāgragrhītaśaṣpadarbham  
tvaritam pratyudiyāya baddhapañkti // [11.47] (Mālabhāriṇī)

遠くから群のかしらを見つけ、歓喜したその鹿の群は、逢いたさに満ちた眼で、若草の束を齒の先に啜えたまま、群がって急いで駆け寄ってきました。

vinimīlitalocaneva yāsīd  
dharinī yūthapatau gate vanāntāt /  
samupeyuṣi saiva tatra dhīre  
punar unmīlitalocaneva jātā // [11.48] (Mālabhāriṇī)

鹿のかしらに森の奥から去った時に、雌鹿は眼を閉じたかのようにでしたが、心堅固な者がそこに近づいた時、ふたたび眼をぱっちり見開いたかのようにになりました。

āgama sātha hariṇī hariṇapradhānam  
ittham jagāda muditā calitāyatākṣī /  
prahlādayan mama manaḥ śīsur eṣa dāve  
saṃkrīḍate hariṇanātha tava prasādāt // [11.49] (Vasantatilaka)

かの雌鹿は鹿のかしらのところに行って来ると、歓喜して大きな眼を揺らしながら、このように言いました。「あなた様のお助けにより、鹿王よ、私の心を楽しませてくれるこの子は、森の中を遊びまわることでしょう。」

bodhisattvo 'pi ca tan mṛgayūthadvayam āsvāsya parāṃ prītim upajagāma | tad evaṃ parahita-  
parāyaṇaḥ sa bhagavāms tiryagbhūto 'py āsīd iti vincintya tadupāropitaprasādā bhavata yūyam iti  
||

菩薩はその二つの鹿の群を安心させてから、無上の歓喜を得ました。

このようにかの世尊は〔前世に〕動物であっても、他者を利するために懸命だったのです。こう熟慮して、あなた方はかのお方への浄信を生長させてください。

|| mṛgajātakaṃ prathamam ||

〔第2部類の〕第1、『鹿ジャータカ』〔終わる〕。

<キーワード> Haribhaṭṭajātakamālā, Mṛgajātaka, Jātaka, ハリバツタ、ジャータカマーラー

(九州大学大学院教授, Ph.D.)